初代会長・家田先生逝く

本　田　　清

本会初代会長家田三郎先生は，平成元年5月24日，胃がんのため逝去された。83歳。告別式は，同29日，ご自宅において神式で執り行なわれた。多数のご親戚・知己の参列があったが，日本白鳥の会には，残念ながら「告げ人」がなく参列できなかった。同年7月の本会総会で，はじめてこの事実が知らされ，総会終了後に現副会長の私が，本会を代表して霊前にひれ伏し，弔慰を表してきた。合掌。

"野の遺賢"露と消ゆ

家田三郎は，83年の生涯のうち，65才からの8年間，日本白鳥の会初代の会長職を全うし，このことを誰に語ることもなく卒然として逝った。

家田は，新潟大学医学部時代，中田瑞穂博士（世界的な脳外科医，文化功労者，俳人，1893～1975）の高弟のひとりであった。第二次大戦中は，軍医として召集され，中支戦場の修羅場を体験，戦後は，新潟県内や山形県内の公立病院長等を務めたが，44才で辞し，郷里水原町で開業した。以後は「赤ひげ」のように存在感のある町医者として凛々たる一生を貫いた。

この家田三郎の人柄や業績を，一言にして語ることはむつかしい。しかし，あえていえば「反骨・弧高」「酒脱・磊落」「博賢強記」「手づくりの文化を愛した寸鉄直言居士」というような言葉を使えば，ある程度までは当てはまるように思う。しかし，根底にはいつも人間愛を秘めていて花も実もある度量の大きい人であった。

家田三郎と私との出合いは，1960年ころのことで，家田は水原町公民館長職にあり，私は新潟県公民館連合事務局長としてであった。さらには吉川重三郎（初代瓢湖の白鳥保護者）との交流を通じてであった。

瓢湖は，そのころ渡来白鳥の餌づけで一躍有名になり「重三郎と白鳥の物語り」は小学校の教科書にまで載るようになった。野生動物に対する餌づけという人間活動は，本邦においては「高崎山のサル」

〒950－01　新潟県中蒲原郡亀田町水道町4－7

とともにまだ珍しい時代で，瓢湖には見物人がふえ，有名無名のカメラマンをはじめとしマスコミが押し寄せていた。このためヒトと渡来白鳥の引き起こす不条理な問題が，多様なかたちで派生していた。これらの難問に重三郎が対応しきれなくなると，それはただちに家田に回ってきた。家田は，問題ごとに，どこをたたけば効果が上るかを見極わめ，卒先即決，電話一本で水原町長や県当局などに直言し，その解決を早めることに努めた。そのことばには「寸鉄人を刺す」いきおいがあり，大久保彦左衛門のような重みとほほえみがあったので，ほとんどが「鶴の一声」のように，たちまちにして解決するものが多かった。

水原町役場では，当時「イエダサブロウだが，課長はいるかね。」という電話が入ると，みんなが白鳥のように一せいに首を上げて緊張した。という話が伝わっている。

瓢湖が，同県の佐潟（新潟県の白鳥のルーツ）に先がけて，白鳥渡来地として国の天然記念物に指定されたのは，家田三郎の見識とそれをよく理解する江村重雄（新潟大学理学部教授，県文化財審議委員当時）などの絶妙な人脈が功を奏したからであった。

瓢湖の白鳥保護の事績を云々する場合，吉川重三郎の功績に帰結させることはたやすいが，ほかにも何人かの重要なコーディネーターがいたことを忘れてはならない。その一人が家田三郎であり，もう一人は新田加造（地元猟友会長）であった。新田は，瓢湖に舞い降りた白い大鳥が，白鳥であることを同定し，ただちに「瓢湖の銃猟禁止区域指定」を思いつき，それを卒先して推進してくれた人である。その措置があって，はじめて渡来白鳥は定着するようになった。

さて，私が瓢湖と深く関与するようになったのは，重三郎が，白鳥の給餌を長男繁男に引き継ごうとしていたころである。白鳥の保護管理のために瓢湖には問題が山積していた。吉川個人のやれることには限界があり，物心両面にわたり守るための組織が必要であると思っていた。

第４回日本白鳥の会総会にて。家田初代会長（左端），横田義雄，相沢幸四郎，大森常三郎，畠山正光，岩田正俊，玉田誠など，オソリティーの顔も見える。

私は「瓢湖の白鳥を守る会」の会則（案）を起草し，仲間とともに家田三郎宅に伺い，本人の意見を聞きに行った。

そのとき，家田三郎の口から発せられた諧謔と風刺に満ちたことばのいくつかは，いまでも忘れることはできない。

「オレは，白鳥なんて，大きらいでね。白鳥を好きだという人間も好きになれないね。」

「キミたちも，白鳥保護が大切だとかなんとかいっているが，やがて白鳥が何万羽にもふえたら撃ち殺す側に回るんじゃないのか。」

「人間による白鳥保護が必要だというけれど，野生動物は，広い自然界のなかでの棲み分けが必要なんだよ。……結局は，自然保護が大切だということだろ。」

私は，それを聞いていて（万物の霊長とかいって，君主づらをした人間が，どうして野生の白鳥をとりしきれるというのか。）とたしなめられているような気がしていた。

この年，家田三郎65才。その気迫に圧倒されながら，41才の私がそれにどう応じ，どういうことばで押し返したのか，いまでは残念ながら大方忘れてしまった。

「棲み分け」とか「自然保護」ということばは，いまでは日常語になってしまったが，当時，そういう視点から白鳥保護を語れる人は，ほとんど見当らなかった。

瓢湖の白鳥を守る会は，家田三郎会長を迎え1971年に発足し，その２年後に発足する日本白鳥の会の機関車の役割を果すことになる。組織草創以来の10余年間，私は，この名会長のもと，理事あるいは事務局長として全力を傾注することができ，まことに幸せであった。

遠出が億劫で，しかも東京の雑踏がきらいだという家田三郎が，日本白鳥の会会長としての８年間，東京での総会に一度も欠席することもなく，多くのサムライを相手にその運営に独自の雅量を発揮していたのは，多くの会員の知るところである。

私の撮った瓢湖の写真特集が，国際グラフ誌に載ったことが動機となって，1971年12月英国のスリムブリッジで開かれることになった第１回国際白鳥シンポジウムに，吉川繁男，ローゼ・レッサー（法大・日大講師），それに私の三人が招かれるということがあった。こんなときも，まっさきに賛成してくれ，町当局にも働らきかけ，勉強会を開くことを計画させたり，佐藤町長（当時）を現地視察に派遣するなどの推進力となってくれた。スリムブリッジの水禽公園をモデルとして，いま着々と進行中の瓢湖の水禽公園づくりは，ここから出発したものである。

ついでながら記しておくが，のちに同町町長となる渡辺勇も，私が「瓢湖の白鳥を守る会」の組織結成の必要を説いたとき，ただちに賛同し，家田に進言してくれた一人である。

瓢湖北側の水田一帯が，宅地開発されそうになったとき，結成早々の瓢湖の白鳥を守る会は，さっそくその反対運動に立ち上った。私権との戦いであり，完勝とはいかなかったが，一定の成果は上り，その後文化庁の予算で瓢湖周辺一帯の水田が買い上げられるという恒久策につながった。

1970年，私をたよって来湖したローゼ・レッサー女史を，家田もよろこんで迎えてくれ，理路整然たるドイツ流の白鳥保護策と人間管理策を述べるローゼ女史をむこうに回し談論風発。「このくそババァが。」といって笑い飛ばしつつも感服していたこと。

石原慎太郎がきたときには，自家用車を持たない家田が「ウチの16台の車が全部出払っているので，きょうはよその会社のタクシーで……。」と例によって陽動作戦。「先生はタクシーも経営してらっし

ゃるんですか。」と石原。となりに同乗していた寺内大吉が「東京もんは，何んでも真に受けるんですよ。」といっ大笑いしたとか。こうして多くの有名人が訪れるたびにそのホスト役を引き受けていた。

吉川繁男に面と向って「シゲオなんてくそバカだよ。」そばにいた人が「なぜですか。」と詰問すると，「バカがわからぬ，あんたもウスラバカだよ。」といなされる。みんなは，ただわらうばかりであった。

あるときの酒席。地本出身の県議が，私に対して見下した言辞をはき，あげく「本田の写真が何んだ。写真で何ができる。」などと愚弄した。となりで，それを聞きとがめた家田三郎，その県議に一喝，「ではお前自身は何をしてきたか。ヒトに言われたことをチョッコリしてきただけではないのか。」

向き直っては私に，「本田よ，こんな阿呆のいうことにひるむな，気にするな。」といって呵々と笑いすてるのであった。

この誰にもへつらわぬ侠気こそ，人望のあつまるところであり，多くの人から畏敬される秘密であった。

家田はまた，勲章をもらいたがるような人をわらい，それでももらってしまった人には，「ぶらさげる物がふえてよかったね。」という酒落者であった。

本人は，ヒトの意気に感じて，やむなくことをあげる。しかし，自ら決して名利を求めるようなことはしなかった。

私に対する痛烈な揶揄のきいた「はがき」も何枚か残っている。私がＮＨＫブックスから「白鳥のいる風景」という本を出したときの一枚には，「白鳥は〝恋う恋う〟と鳴く神秘な鳥だ。などといいながら，その神秘のベールを一枚一枚剝ぎとってきたバカ者が本田という男だ。」というもの。そのくせ，私が本を書くに当っての資料あさりのときには，自らたくさんの資料・コピーを送ってくれたり，多大のヒントを与えてくれていた。

家田三郎は，俳号を小力子といい，俳人高浜虚子の主宰する「ホトトギス」の同人であった。直接の師の中田みづほ，高野素十などとともに吟行で，よく私の住む水郷亀田の農家などに出向いた。誰よりも郷里の風物，文化を愛し，ひとつことに打ち込む人間を愛した。

「本田，モタモタしていてオレのように何者だかわからない人間になるなよ。」というのが口ぐせであった。傍若無人とも見える言動のウラに，医者であると同時に自他を知る哲人のような深い思慮があった。

筆マメで，たくさんの随想，評論等を書き残した。自らも「便所で執筆する文学じじい」といっては，意表をつく話題を提供したり，ときの問題点をえぐり出してみせた。当時，評論家の細川隆元などと渡り合う機会があったら，いい勝負だったと思う。

「野に遺賢あり」ということばにふさわしい人物。蒲原生れのダンディ。それが家田三郎であった。

遺賢・重鎮のいなくなった瓢湖。これから，どうなるのか。

ここに俳人家田三郎の多数の遺句のなかから，当方が勝手に選んだ７句を載せさせていただく。

癒えぬこと知りつつ師走待ちにけり

凛々とみどりの苔の露固し

小鳥たちくるる青葉をしきり飛び

流れ星回転ドアを押して出て

わらす顔して亡くなりぬ五月の夜

瑠璃秘めて烏揚羽のなきがらに

ディ・アンド・ナイト人生セプテンバー

家田会長略歴

本籍地　新潟県北蒲原郡水原町中央町1丁目4177番地
現住所　新潟県北蒲原郡水原町中央町2丁目13番21号
氏名　家田三郎
（明治39年6月22日生）

昭和5・3・31	新潟医科大学卒業（外科学専攻）
昭和5・4・1	新潟医科大学外科教室勤務
昭和10・4・1.	新潟医科大学法医学教室講師
昭和12・1・20	医学博士号授与
昭和12・2・28	秋田県横手町立病院副院長
昭和13・5・15	新潟県新井町頸南病院院長
昭和19・8・31	新潟県新発田連隊入隊
昭和19・10・29	中支漢国第一陸軍病院軍医見習士官
昭和20・1・7	軍医少尉
昭和21・7・29	傷病者輸送指揮官として福岡に帰還（軍籍解除）
昭和21・8・10	新潟県新井町頸南病院院長（復職）
昭和22・11・15	山形県鶴岡市立庄内病院院長
昭和26・9・3	新潟県北蒲原郡水原町に開業（現在にいたる）
昭和27・11・21	水原町公民館長
昭和37・4・1	新潟県医師会代議員
昭和39・4・1	財団法人日本民芸協団新潟支部長
昭和39・4・12	水原町文化財調査審議会委員長
昭和42・5・1	水原町立水原博物館館長
昭和46・3・13	瓢湖の白鳥を守る会会長
昭和48・6・24	日本白鳥の会会長
昭和54・7・3	財団法人日本民芸協団庵地支部支部長
昭和57・3・31	新潟県医師会代議員退職

白鳥保護・文化財に関する御業績

昭和27・11・21　水原町公民館長就任。これより昭和39年退任するまで町盆踊り大会を始め，公民館

活動のまとめ役として活躍した。

昭和39・4・12　水原町文化財調査審議会委員長就任。これより現在まで，町文化財指定14件に関する審議など，多くの文化財保護啓蒙に貢献する。

昭和40・6・8　文化財保護に貢献した功績により，新潟県文化財保護連盟より表彰状を受く。

昭和42・5・1　水原町立水原博物館長就任。これより現在まで，多くの資料収集を始め，常設・特別展示などの博物館活動を中心となって実践する。

昭和45・11・5　文化財保護に貢献した功績により，文化庁より表彰状を受く。

昭和46・11・23　自治功労者として，水原町より表彰状を受く。

昭和50・11・3　社会教育振興に貢献した功績により，新潟県教育委員会より表彰状を受く。

昭和51・5・13　白鳥保護に貢献した功績により，日本鳥類保護連盟より表彰状を受く。

昭和52・9・24　白鳥の保護奉仕活動と，日本白鳥の会に貢献した功績により財団法人動物愛護協会より表彰状を受く。

昭和55・11・3　白鳥保護に貢献した功績により，秋の叙勲として木杯を受く。

昭和57・5・9　白鳥保護に貢献した功績により，日本鳥類保護連盟より総裁賞を受く。

昭和60・11・10　水原城館及び水原代官所跡・碑建立を計画，発起人代表として計画をまとめ，文化財保護啓蒙に貢献した。

昭和62・7・5　水原における水原氏最後の城主，水原常陸之介の墓修復を計画し，山形県米沢市・林泉寺において計画を実行，水原町の文化財保護活動を知らしめた。